

蘭学・英学における翻訳法と日本語

湯 浅 茂 雄

1 はじめに

日本語と西洋語との出会いは中世末にはじまる。すなわち、16世紀末から17世紀初頭にかけてのポルトガル語との出会いである。来日したカトリックの宣教師たちによって布教のため各種の文献（キリシタン資料）が作られ、これらは『日葡辞書』などにみるように、当時の日本語の様子を知るための一級資料の価値を持つが、日本語に及ぼした影響としては、ポルトガル語を起源とする外来語を日本語に残したなどのことは認められるが、全体的には軽微なものであったといつてよい。それに対して、特に江戸中期以降に隆盛を迎える蘭学（オランダ語を通して受容された西洋諸学）と、幕末に蘭学に替わって盛んとなる英学は、日本語の語彙に大量の翻訳語を生み出して語彙の更新をもたらし、また、表現としても欧文脈を生んで、書き言葉（言文一致体の成立）、話し言葉（標準語の成立）に大きな影響を与えた。

本稿は、このように日本語に大きな影響を与えた蘭学・英学の翻訳法と訳語法はどのようなものであったかを明らかにし、ここから日本語に与えた影響について具体的に言及しようとするものである。

2 蘭学・英学における翻訳法

上に述べたように西洋語の翻訳はキリシタン時代にあるが、この時代の翻訳の主体は、あくまでポルトガル人の宣教師であり、そこに日本人信者の協力が加わったものである。外国人が主体であったことから、語基創造などを初めとして、日本語自体に手をつけることは可能な限り避けられたと考えて

よい。これに対して蘭学時代の翻訳は、ちょうど逆の方向をとった。必ずしもネイティブが近くにいない環境で、日本人が主体となって行われたこと、しかも蘭学が必要とするものは多くは実学であり、一刻も早く、より多くの内容を机上で翻訳しようとしたことから、必要によっては語基創造も厭わず、日本語の質的变化につながる翻訳が進められたのである。この際には、日本人が古くから読み解いてきた外国語学習の方法が活用された。漢文訓読の方法である。

蘭学における翻訳法を端的に示す資料として、実質的に『解体新書』の翻訳の推進者であった前野良沢の『和蘭訳筈』（天明5〈1785〉）の「蘭化亭訳文式」がある。以下に「訳文」の方法を述べた部分と、それに連続する部分ではないが、例題の一つを引用する。（『日本思想大系64 洋学上』による）

蘭化亭訳文式

凡、翻譯ヲ為ス者、宜先線字ヲ用テ、原文ヲ謄写スベシ（如其「ホオフト」ノ体ヲ以テスル者アルトキハ、コレヲ略書スベカラズ。又、句読・点画ノ如キ、必コレヲ失誤ス可ラズ）。次ニ、毎言下訳字ヲ記ス（漢字・国字、其宜ニ随フベシ）。

如發言・助語ノ辞正訳シ難キ者ハ○圈ヲ附スベシ。如訳字義ニ随テ転ズベキ者アラバ、則半圈（ヲ正訳ノ左ニ附シ、而義訳ヲ右ニ記ス。或直ニ義訳ヲ用ユルトキ。小圈を其右ニ附ス。

如義訳弁ズベキトキハ、先三角△ヲ其傍ニ附シ、其弁ヲ別處ニ記ス。此處亦宜ク三角ヲ設クベシ。如他字ヲ加テ其語意ヲ達スベキモノハ、其字ニ勾「画」ヲ設クベシ。又、如名称亦コレヲ用ユ。或ハ圈□ヲ設。次ニ甲乙等小字鈴ヲ附シテ、語路ヲ指点スベシ。末ニ切意ヲ録ス（国語・漢文、事ノ宜ニ随テ、コレヲ用ウベシ）。

（例題の一つ）

読法 デセ ラアトステ ドルニク ネェルスチグ オフルシイン
エン ハン ホウテン ゲメイヘルト テ アムステルタム
ベイ イサアカ ハンデル ピュッテ ブックフ
ルコオペル セエヘンチイン ホンドルド ヘェルテキ

訳言 △ラアトステ（末ヲ云也。而レドモ、此書、再三改刻セルヲ、今復新刻セル者ヲ指ス。故新トス）。

△ベイ（従ヲ云。此書ノ出ル所ヲ指ス。故ニ発行トス）。

△セエヘンチイン云々（此識号ノ文字、末篇ニ出ル所ノ算数ノ条ニ就テ、コレヲ詳ニスベシ）。

切意 此新刻ハ、終篇細密ニ校訂シ、且誤字ヲ改正スル者ナリ。干

Deze laatste Druk neers-
此（未新・△刻 細
甲乙 丙戊密

tig overzien en van Fouten,
（悉校終且者 誤字
（見丁篇庚癸 辛
己丁 辛

Gezuyvert i' Amsterdam
（清改・○名都蘭和
（之正。 丑
壬

By Isaak van der Putte
（従発・△名 姓
行・辰

Boek Verkooper
書
賈
寅

時紀元千七百四十年、アムステルダムノ書賈、イサアカ ハン
 デル ピュツテ発行。
 △按ズルニ、此年数、今年天明乙巳ヨリ四十六年前ニ当ルナリ。

MDCCLXL.
 千七百四十年
 宇時子

「訳文」の方法を整理し、必要な補足を加えてまとめると以下のようになる。

- ① 原文をそのまま写す（原文ヲ謄写スベシ）。
- ② 原文の各単語の下に、単語の原義に相当する漢字を記す（每言下訳字ヲ記ス）。文脈によっては原義に対する派生義が相当する場合にはその意味に当たる漢字を記し（義訳ヲ右ニ記ス）、原義と派生義の関係を記号によって区別する（半圈ヲ正訳ノ左ニ附シ・・・）。
- ③ 全体の文意をとるべき語順を記す（語路ヲ指点スベシ）。その順で文意を取る。
- ④ 最後にこなれた日本語に整える（切意ヲ録ス）。

すなわち、この翻訳法を端的に言えば、オランダ語をまず漢字文字列に変換し、これを漢文訓読の方法を応用して、オランダ語の語順で読み下す方法である。以下の藤林普山『訳鍵』（文化10〈1810〉刊）の凡例中の「訳例」も、「オランダ語原文→漢字文字列→オランダ語語順による読み下し」の方法を典型的に示すものである。

脾 肝 赤 又 闇 様 而 軟 一 物
DE Milt is een rood of bruinachtig en week deel, het
 此 胃 腸 爲 一 物 爲 一 分 解
 welk zich gemakkelyk laat van een scheiden,

上の読み下しは、「脾ハ赤又闇様ニシテ軟ナル物ナリ 此レ自ラ分解ヲ為シ易シ」となる。

「蘭化亭訳文式」に戻るが、ここにみられる「訳字」と「切意」は重要である。「訳字」は、以下に述べる訳語法とも密接に関係するが、まさに原語の意味に相当する字（漢字）の意味で、現在からみると「訳語」といえそうな場合も「訳字」といっていて「訳語」とはしていない。「訳語」といわれるようになるのはずっと後であり、それまでは、「語」というよりも、当てられる「訳字」（漢字）ということが強く意識されているのである。

「切意」は、④にまとめたように、最終段階の訳文というべきであり、そこに至る前に直訳的な訳文が想定される。これは後にいう欧文直訳体である。以下は英語学習の独習書として明治期全般にわたって極めて多く出版された資料群の一つであるイーストレキ・本田正訳『ニューナショナル第三リーダー獨案内』（明治33〈1899〉刊）の一部である。

イツ ヴェリイ ハード IT'S VERY HARD. 其ガアル 甚ダ 難ク 1 4 2 3						
イツ “It's 夫レガ 15	ヴェリイ very アルト 甚ダ 18 16	ハード hard 難ク 17	ツー to ノ 14	ハヴ have [何モ持タス] 13	ナッシング nothing ミルク milk 牛乳トノ 9	
ツー to 可キ 12	イート eat 食フ 11	バット but 外 10	ブレッド bread 麵包 7	アンド and ト 8	フード food, 食物ヲ 4	
ホウエン when 時ニ 6	アザー other 他ノ 1	ボーイズ boys 小子等ガ 2	ハヴ have 持ツ 5	ナイス nice 美ナル 3	フード food, 食物ヲ 4	
セッド said 云ヒキ 20	ビームス James, ーガ 19	アズ as 時ニ 28	ヒー he 彼ガ 21	サット sat 坐リシ 27	ウイズ with 以テ 26	ヒズ his 彼レノ 24
ボール bowl 椀ヲ 25	ビフォーア before 前ニ 23	ヒム him. 彼ノ 22				

第二章 意 解

ソレハ甚ダ苦イデス

ヨソノ子供達ハ大キナ皿ノ中ニチ
 イシ御馳走ガ澤山アルニ唯「パ
 ン」ト牛乳ノ外ニ何シモ食ベル
 物ノナイノハ甚ダ苦シイデス。又
 タ寒イ朝ニ早ク起キテ外ノ子供達
 ハ何事ヲシナイテ濟ムノニ引き換
 ヘテ烈シク働カケルハナラ、ソノ
 ハ甚ダ苦シイデス。多ノ子供達ハ
 棧ニ乗行キマスニ雪ノ中ヲ徒歩キ
 マスノハ大層苦シイデス。トセー

ムスガ自分ノ前ニ茶椀ヲ置テ坐ツ
 タ許申シマシタ。
 イ、エソレハ大キナ幸福ナラデス
 也。世間ニハ多クノモノカ食ベル
 モノモナク寒風ノ吹き荒ミ堪ヘ難
 キ日ニモ住フ家モオクテ軒下ヲ木
 陸ニ寝テフルエテ居ル憐レナ子供、
 ハ自分ヲマシメテ御マヘハ食ベル
 ても出来風雨ノ夜寒キ日ニモ住フ
 家ノアルノハ大キナ仕合ノラデス

この場合、原語の下に配された訳字（この時期には訳語といってよい）を「語路」の順にしたがって、その一部を読み下すと以下のようなになる。これが欧文直訳体である。

・他ノ 小子等ガ 美ナル 食物ヲ 持ツ 時ニ 麴包 ト 牛乳トノ 外 食
フ 可キ 何モ持タヌ コトノ 夫レガ 甚ダ 難ク アルト ……

これに対する「切意」に相当する「意解」は以下である。

・ヨソノ子供達ハ大きな皿ノ中ニライシイ御馳走ガ沢山アルニ唯「パン」ト牛乳
ノ外ニ何ンニモ食ベル物ノナイノハ甚タ苦シイデス ……

「小子」と「子供」の表記レベル、「麴包」と「パン」、「食う」と「食べる」の単語レベルの差にも注意されるが、なんといっても注目されるのは直訳段階で「甚ダ難クアルト」とあるものが「甚タ苦シイデス」と、語法的にこなれた日本語に直されている点である。欧文理解のためにこのような直訳に親しんだ人々の間に、いくつかの言い回しや構文法が定着するようになると、一般の文章にも直訳特有の表現を用いることが行われるようになった。それら直訳特有の表現が欧文脈である。なお、欧文直訳体と欧文脈の用語は、必ずしも区別されずに用いられることがあるが、筆者は、欧文直訳体は、欧文学習・理解のために生じた臨時的な文体として、原文に依存するものであり、表現に用いられることはない文体、後者は、上に述べたように、欧文直訳体から生じたもので、それまで日本語になかった構文法や独特の言い回しが表現に用いられたものと考えている。

欧文脈の具体例を『国語学研究事典』「欧文直訳体」の項（遠藤好英氏執筆）で示されたものから一部引用させていただくと以下のようなものがある。

- ・抽象名詞が主格に立つ（「巨勢が胸にはさまざまの感情戦いたり」森鷗外『うたかたの記』）
- ・非人称代名詞を主語とする（「それは二月のある宵であった」菊池寛『春』）
- ・指示代名詞がその後の後のことを指す（「これは足助には内所だが、僕はまだ『惜しみなく愛は奪う』にとりかかっている」有島武郎の原久太郎あて書簡）
- ・擬人法（「口惜し涙が承知をせず、両目に一杯溜まるので」二葉亭四迷『浮雲』）
- ・挿入句（「あるほどの木々の葉一峯の松のみ残して一大方吹落しぬれば」尾崎紅葉『色懺悔』）
- ・倒置表現（「例の同僚は嗤つた。鷺見は全力を挙げて其妻に惚れてゐるのだと」尾崎紅葉『多情多恨』）
- ・関係代名詞の直訳的表現（「客が売らうとしてゐるところの嵩ばかりあつて一向値にならない書物」佐藤春夫『都会の憂鬱』）

・進行形（「船員と何事かを物語りつつあつた」国木田独歩『春』）

これら欧文脈は、明治20年代に明確な形を整える明治普通文にも多く取り入れられ、以後の言文一致体の成立にも影響を与えた。また、欧文脈は書き言葉の上だけでなく、話し言葉の上では、標準語の成立にもかかわったのである。

3 蘭学・英学における訳語法

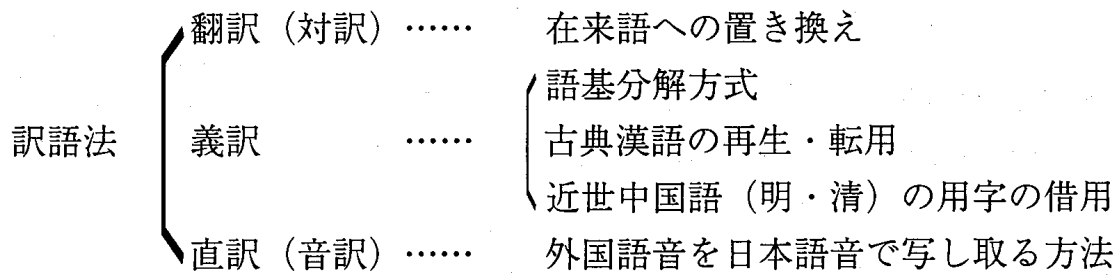
蘭学における訳語法は、以下の杉田玄白『解体新書』（安永3〈1774〉刊）の凡例（原文は漢文体）に端的に示されている。

- 一、訳に三等あり。一に曰く翻訳、二に曰く義訳、三に曰く直訳。和蘭呼びて^{ベンアレン}価題験と曰ふ者は、即ち骨なり、則ち訳して骨とふが如きは、翻訳これなり。また、呼びて^カ加^ワ蠟^カ仮^{ベン}価と曰ふ者、骨にして^{やわら}軟かなる者を謂ふなり、^カ加^ワ蠟^カ仮なる者は鼠の器を^か嚙む音の如く^{しか}然るを謂ふなり、^{けだ}蓋し義を脆軟に取る、^{ベン}価なる者は^{ベンアレン}価題験の略語なり、則ち訳して軟骨と曰ふが如きは、義訳これなり。また、呼びて機里爾と曰ふ者、語の当つべきなく、義の解すべきなきは、則ち訳して^{キリイル}機里爾と曰ふが如きは、直訳これなり。余の訳例は皆かくの如きなり。読む者これを思へ。

玄白のいう「翻訳」（のちに「対訳」とも）は、「river = 川」のように、原語の意味に相当する在来語に置き換える方法であり、翻訳の基本をなす方法である。つぎの「義訳」は、在来語に置き換えられない場合に、原語を語基に分解し、原語の語基の意味に相当する漢字を当て、それら漢字を、いわば積算して全体の意味と「訳字」を導き出す方法（以下、「語基分解方式」と称する）である。「義訳」は日本語における語基創造となり、この方法により、多くの和製漢語としての新語を生じさせた。「直訳」（のちに「音訳」とも）は、外国語音を日本語音で写し取る方法であり、外来語としての新語を生じさせた。玄白の「翻訳」「義訳」「直訳」の方法は、蘭学のみならず、英学の時代にも共通するものであった。

「義訳」も「直訳」も同じ新語を生じさせる方法であるが、近代における日本語語彙の更新に大きな役割を果たしたのは「義訳」である。近代語彙の更新という観点から、明治期をも視野に入れ、「義訳」を拡大して考えるとその中味は、玄白のいう語基分解方式のほかに、古典漢語の再生・転用、近世中国語（明・清）の用字の借用も含めて考えることができる。これら、蘭

学・英学時代の訳語法を整理して示すとつぎのようになる。



以下には、具体例を挙げて、翻訳、義訳の翻訳法における問題点や特色に触れておく。

〔在来語への置き換え〕 翻訳は、最も基本的な方法であるが、歴史・文化の異なる言語間の翻訳には当然のことながら限界も生じる。以下は堀達之助『英和対訳袖珍辞書』(文久2 <1862> 刊) の「翻訳」(在来語への置き換え) に相当すると考えられる訳語例である。

Admiral, s.	船大将	Citizen, s.	町奉行	War, s.	合戦
Drama, s.	浄瑠璃ノ類	Horseman, s.	騎馬		

現在 Admiral は提督、Drama は戯曲と訳されるが、当時の置き換えによる「船大将」「浄瑠璃ノ類」では、いかにも江戸的なニュアンスが勝ちすぎ、近代的な概念を担う訳語としては限界があった。

〔語基分解方式の訳語法〕 また、義訳のうち、語基分解方式の訳語法は体系的・組織的な造語、訳語作りができることを意味する。宇田川榕庵『舎密開宗』における化学用語の例であるが、酸、硝、塩、硫と訳字を一定しておけば、以下のような体系的、組織的な訳語作りが可能である。

Zuur = 酸 Salpeter = 硝 Zout = 塩 Zwavel = 硫



語基分解方式による訳語法は科学技術分野において効力を発揮し、盛んに行われた方法であった。

〔古典漢語の再生・転用〕古典漢語の再生・転用は以下のような例を指す。井上哲次郎『哲学字彙』（明治14〈1881〉刊）から拾うとづぎのようなものがある。

Absolute 絶対 按、絶対孤立 自得之義、対又作待、義同、絶待之字、出于法華玄義

Metaphysics 形而上学 按、易繫辭、形而上者、謂之道、形而下者、謂之器

Category 範疇 按、書洪範、天乃錫禹洪範九疇、範法也、疇類也

Induction 帰納法 按、帰還也、納内也、韻書、以佐結字故云帰納、今仮其字而不取其義

いずれも『法華玄義』『易経』『書経』あるいは韻書に典拠があることが示されているが、それぞれの原典における意味で用いることを意味しない。典拠ある「訳字」を求め、その内容（意味）に原語の意味を注ぎ込むのである。原典での当該用語の意味が全く翻訳語としての意味と無縁とはいえず、決して恣意的な「訳字」探しではない。しかし、「範疇」は「洪範九疇」（禹が堯舜以来思想を整理し集成した天地の大法）の四字句から縮約された形であり、再生・転用にさらに変形が加わったものである。この点、「範疇」は原典の意味を保持することは考えられず、「訳字」としてあらたな意味を盛るべき器として機能するのみである。漢字語として文字列から意味を知ることができない以上、「カテゴリー」と音訳するのとほとんど替わるところはない。出来る限り漢字語で翻訳を行おうとしたこと、そこには典拠ある文字列（「訳字」）が求められたという明治期の特殊事情が窺えるのである。

「Liberty」「Freedom」の翻訳語としての「自由」もまた、古典漢語の再生・復活により生じたものである。『後漢書』等にみえる言葉であり、「思うままにふるまえる状態、勝手気まま」を意味し、我が国でも8世紀から使用例があり、以後も少なからぬ使用例がある。しかし、「思うままにふるまえる状態、勝手、気まま」の意味では「Liberty」「Freedom」の原語の意味にはならない。古典漢語「自由」に、新たに原語の意味を注ぎ込み、翻訳語「自由」として再生させたのである。明治初期には「自由」のほかに「自主」「自在」などさまざまな訳語が試みられたが、最終的に「自由」に定着した。現在、「自由の意味をはき違える」などと云われることがあるが、その要因は、翻訳語のもとになった漢語「自由」の手垢のついていた意味に内在していたといえるのである。古典漢語「自由」と翻訳語「自由」のせめぎ合いは今も続いており、日本人にとって翻訳語「自由」の意味は常に問われ続けていると

いってよいであろう。古典漢語の再生・転用および以下の近世中国語（明・清）の用字の借用に起こりがちなのであるが、これらの翻訳語は西洋舶来の新たな意味を注ぎ込む器（訳字）としての機能が重要であり、新たな意味の理解が後から追いかけるといった状況が起こりがちである。翻訳語におけるこのあたりの事情を柳父章は「カセット効果」と名付けている。同氏の『翻訳語成立事情』から一部を引用する（翻訳語「個人」をめぐる考察から）。

ここで重要なことは、こういう「四角張った文字」の意味が、原語individualに等しくなるのではない、ということである。これらのことばをいくら眺めても、考えても、individualの意味は出てこない。だが、こういう新しい文字の、いわば向う側に、individualの意味があるのだ、という約束がおかれることになる。が、それは翻訳者が勝手においた約束であるから、多数の読者には、やはり分からない。分からないのだが、長い間の私たちの伝統で、むずかしそうな漢字には、よく分からないが、何か重要な意味があるのだ、と読者の側でもまた受け取ってくれるのである。

日本語における漢字の持つこういう効果を、私は「カセット効果」と名づけている。

古典漢語の再生・転用は、どちらかという科学技術分野よりも人文科学分野において行われた訳語法であった。

〔近世中国語の用字の借用〕近世中国語（明・清）の用字の借用は、日本よりも早く洋学の洗礼を受けた中国での翻訳書・辞書等の用字を借用する方法である。中国での翻訳書は「漢訳洋書」と称されるが、キリスト教に関わらない漢訳洋書は蘭学時代にも出島を通じて我が国に多く舶載され、オランダ語を通して受容された西洋諸学の翻訳の際にも、蘭学者によって盛んに参照されたのである。辞書は「英華字典」と称され、多くの種類があるが、中でも幕末・明治初期のものとしてロプシャイドの『英華字典』は、明治期の英和辞典や学術書の翻訳に与えた影響が極めて大きい。今、明治前期の中心をなし、後世に与えた影響も大きな『英和字彙』がロプシャイドの『英華字典』から借用したと考えられる「訳字」を『英和字彙』（柴田昌吉・子安俊明治6（1873））の見出し語の最初の部分から、いくつかを例示すると以下のようなものである。

『英和字典』

『英華字典』

A, the first letter of the English Alphabet. 英語利字母ノ首字

A, the indefinite article; like *one*, it has been called an adjective. [See An.] 不定冠詞、一又或ニ、以テ起ル、數名詞ノ前ニ用フ、

A man. 一個人

A week. 一週日

Twice a day. 一日兩次

(中略)

Aback (a-bak'), *adv.* 後ニ、後邊ニ、意外ニ、忽然

Abactor (ab-ak' tēr), *n.* 偷牛者

n.

Abaft (a-bäft'), *adv.* or *prep.* 船尾ニ、船後ニ、向テ、後ニ、船尾ノ方ニ

(中略)

Abandon (a-ban' dun), *vt.*; **Abandoned**, *pp.*; **Abandoning**, *ppr.* 捨ル、讓ル、任スル、絶望スル、棄絶スル

To abandon one's self. 自棄スル

To abandon a wife. 棄妻スル

A, THE first letter of the English Alphabet, 英語字母首字, 'ying wá' tsz' 'mó 'shau tsz'. Ying hwá tsz mú shau tsz; its broad and open sound is expressed by 亞 á or 阿 á². A, the indefinite article, is expressed by the numeral, 一 yat, Yih, and is followed by the Classifier defining the noun, as:—A man, 一個人 yat, kó' yan. Yih ko jin; a boat, 一隻艇 yat, chek, 'eng. Yih chih t'ing; a pair of shoes, 一對鞋 yat, túi' hái. Yih túi háiái; a double edged sword, 雙口劍 shéung 'hau kim'. Shwáng k'au kien;

(中略)

A, a year, 一年 yat, nín. Yih nien; twice a day, 一日兩次 yat, yat, 'léung ts'z'. Yih jih liáng ts'z. (vid. Grammar of the Chinese Language).

(中略)

Aback, 後邊 hau', pín. Hau-pien.

Abaction, † 偷牛 't'au, ngau. T'au niú.

Abactor, 偷牛者 't'au, ngau 'ché. T'au niú ché.

(中略)

Abaft, towards the stern, 船尾 shün 'mí. Ch'uen wí, 向船後 héung' shün hau'. Híang ch'uen hau.

(中略)

Abandon, to, 棄却 hí' k'éuk. K'í kioh, 棄妻 hí' ts'ai. K'í ts'í; to abandon a wife, 棄妻 hí' ts'ai. K'í ts'í; to abandon one's property, 棄業 lí' íp. K'í nieh; to part with, 捨 † 'shé. Shíé; I cannot part with you, 唔捨得你, m 'shé tak, 'ní. Wú shíé teh ní; to abandon one's right or privilege, to give precedence, 讓 yéung'. Jáng; to waive one's right to a throne or post of honor, 讓位 yéung' wai'. Jáng wei; to reject, 丟棄 tiú hí'. Tí' k'í; to leave, 遺棄 wai hí'. Wei k'í; to relinquish entirely, 棄絶 hí' tsüt. K'í tsueh; to abandon one's self, to give one's self up to vice, 自棄 tsz' hí'. Tsz k'í, 自暴自棄 tsz' pò' tsz' hí'. Tsz pán tsz k'í.

このうち「自棄」自体は古典漢語として我が国でも古くから使用例があるので『英華字典』に拠る必要はなかったともいえるが、「To abandon one's self」の訳字としては、直接には本書を経由したものであろう。またその他の訳字については、「一個人 (ヒトリノヒト)」「一日兩次 (ヒニリヤウド)」「後辺 (シリヘニ)」「偷牛者 (ウシヌスビト)」「向船後 (フネノウシロニムヒテ)」「棄妻 (ツマヲサル)」の『英華字典』の訳字に、それぞれ括弧内のように訓読を施し、これをルビとして添える形で提示するものである。訓読の日本語は、訳字の読み仮名というより、その意味の説明というべきものである。もちろん「bank 銀行」「chemistry 化学」「electricity 電気」のように、近世中国語の用字をそのまま音読して現代用語に直結するものも少なくないが、以上のような訳字の受容もきわめて多くにのぼった。

近世中国語の用字の借用は、義訳の中で最も生産的な方法であり、大量の

借用が行われたが、日本的な用字との差があり、実際には後に受け継がれなかったものも多いのであるが、借用そのものの絶対数が膨大であったために、実数としては現在に残るものも少なくない。近世中国語の用字をそのまま音読して現代語に直結する用語を補足しておく、キリスト教関係の用語も近世中国語からの借用が多い。明治期の聖書翻訳が漢訳聖書を下敷きにしながら独特の文体を作り上げたことはよく知られているが、その過程で借用が進んだものであろう。「聖書」という用語も近世中国語である。また、数学用語にも多く、「三角形」「四辺形」「長方形」「垂線」「直角」「直線」はじめとして、漢訳洋書である『遠西奇器図説』（明、天啓7〈1627〉）等に見える用語である。

4 おわりに

かなり前のことであるが、インド人のある青年が、日本の大学が日本語で講義していることに関心を示し、「どうやって日本語は、大量かつ急速な西洋学術の受容に、これほど短期間に対応することができたのか」という趣旨の質問を、国立国語研究所に寄せてきたそうである。的を射た質問であろう。明治初期、我が国はきわめて多くの「御雇外国人」を招聘し、西洋の学術・技術の移植の助力を得た。外国人はそれぞれの外国語を用いて学術・技術を伝えたわけであるが、教授を受けた日本人の学者・技術者は、それら学術・技術に関わる用語・概念をいち早く日本語に翻訳し、自らが教授する立場になった時には、すでに日本語による講義・教授を可能としていた。したがって明治20年ごろには「御雇外国人」は激減するのである。現在、もと西洋から舶載された学術・技術が日本語で教授されることを可能にしたのは、上で述べた日本人の翻訳法・訳語法にあることは間違いない。また、インド人の青年のいう「短期間」は明治期を指しているのもであろうが、実は明治期の英学を中心とする時代の前に蘭学の時代があり、西洋概念の日本語への移し替えの前史を持つことを忘れてはならないであろう。さらにその背景として、日本人は、外国語としての古典中国語を読み解く方法（漢文訓読）とその長い伝統を持っていたこと、漢字の造語力と、漢字語の効果を十分に駆使することができたことによるのである。

以上の翻訳法は、日本人の外国語学習に直接教授ではなく、机上での学問というマイナス面の伝統を残したかもしれず、また、訳語法からは、国語国

字問題として、日本語にきわめて多くの漢字語をもたらした点は否めないかもしれない。この点、功罪相半ばするともいえるのである。

参考文献

森岡健二編『改訂 近代語の成立 語彙編』(明治書院 平成3年10月)

森岡健二編『近代語の成立 文体編』(明治書院 平成3年10月)

柳父章『翻訳語成立事情』(岩波新書296 昭和57年4月)

湯浅茂雄「『増補訂正英和字彙』の訳語——特に増補された訳語の典拠を中心に——」

(上智大学文学部国文学科『国文学論集』14号 昭和56年2月)

湯浅茂雄「蘭学資料の語彙——『舎密開宗』の用語を中心に——」(『講座 日本語の語彙5 近世の語彙』明治書院 昭和57年6月)

湯浅茂雄「明治期の専門用語と漢字」(『漢字講座8 近代日本語と漢字』明治書院 昭和63年10月)